

かしま再発見～能古見編～ギャラリートーク

「雲谷等顔と肥前」

期日：平成30年2月18日（日）

場所：エイブル3階 研修室

講師：佐賀県立博物館・美術館

副館長 福井尚寿さん

福井でございます。今日はよろしくお願いたします。

まずは雲谷等顔という人がどういう人物か確認しておきましょう。生没年は、天文16年(1547年)から元和4年(1618年)です。今は主にインターネットで人物を調べることが多いので、ウィキペディアの人物項目に書かれたことをちょっと編集しておりますが、最初に「戦国時代末期から江戸時代初期にかけて活躍した画家」という書き方で出てきます。つまり、雲谷等顔は、美術史では桃山時代と呼んでいる時代の画家です。教科書では安土桃山時代と記されていますが、美術史では桃山時代と呼んでいます。等顔は元和4年までと、慶長の後の時代に少しはみ出しておりますが、ほとんど桃山時代を生きた代表的な画家の一人というふうに位置づけられております。



どの程度代表的な画家かという点、これが微妙でして、美術史の世界では代表的な画家として、4本指に入るくらいの人物なのですが、高校の教科書に載っているかという点、載っていないんですね。桃山時代を代表する画家の筆頭は狩野永徳です。唐獅子図屏風とか、信長が上杉謙信に送った洛中洛外図などの作者として知られています。その次に、松林図屏風などを描いた長谷川等伯という画家、それから海北友松という画家です。その次におそらく名前が上がってくるのが、この雲谷等顔です。高校の教科書では、海北友松あたりまでは出てくるのですが、雲谷等顔はどうも出てこない。微妙な位置、有名ではあるのですが、教科書には微妙に載らないという人物です。美術史では、代表的な画家、巨匠の一人という位置づけです。

出身地については、ウィキペディアにも肥前国藤津郡能古見の出身、生まれというふうに書いてあります。出身はこちらの鹿島市が地元ということになります。

活躍については、長州藩主の毛利家の御用絵師と記されたりしますが、武士として仕えていますので、御抱え絵師といった方が良いかと思えます。幕末まで続く「雲谷派」の祖、創設者という位置づけになるのがこの雲谷等顔です。だいたいこのように紹介される人物です。

皆さんが興味をもっておられるのは、能古見出身ということで、具体的にどのような関わりがあったのかということだと思っておりますが、能古見との関係も含めて、肥前との関係を示す史料は、雲谷等顔が生きた時代には一つも残っていないということでもあります。後で文字資料を紹介しますし、皆様にもお手元に資料を差し上げていますが、1世紀以上後の山口の雲谷等顔関係の史料の中に、初めて肥前の能古

見出身だということが出てくるということでもあります。等顔が生きている時代に、肥前あるいは鹿島と等顔を結び付けるような史料は今のところ見つけ出されていないので、一部の学者の中には、本当に肥前の出身だったのだろうかという人もいますということでもあります。しかし、実際にどちらの出身だったのかというと、それに対抗するような積極的な史料もないので、雲谷等顔自身の家系が作った史料に基づいて、肥前能古見の出身だろうということをも認められる方が多いという状況であります。

次に見ていただきたいのは、佐賀の地で、雲谷等顔がいつ肥前出身だと認識されていたかということがわかる史料です。1845年（弘化2年）に柴田花守という人が書いた『画学南北弁』という本がございまして、序文が書かれたのは1845年なのですが、出版されたのは明治15年という本なんですけれど、その中に「雲谷等顔は時代少し後れて雲谷周徳の法嗣揚門より伝へ、当国の人にて毛利氏の画史となり、雲谷を以て氏とす」というくだりがあります。当国というのは肥前国ということですね。柴田花守というのは、小城の侍で、明治以降に神道の新しい流派を仕立てた人物です。明治以降の工芸教育などに尽力した納富介次郎の父としても知られています。花守自身、詩を詠み、絵も描くという、なかなか多彩な活躍をする人なのですが、その人が日本の画の大きな流れについて書いたのが『画学南北弁』でありまして、その中の肥前の絵画の状況を記した箇所であります。

ですから、極ごく一部を抜き取っているのですが、「当国肥前にも昔より画家多く聞えたり、是又南北の差別有りや」、つまり、肥前佐賀にも昔から画家が多くいたが、その画家の中には南北の差があったのかという質問に答える文章として出てくるくだりです。絵の南北というところとちょっと分りづらいのですが、中国には、絵に南北の別があって、北宗画と南宗画、南画と北画というのです。また、等顔の前に「往昔杵島郡より出し覚鑿上人といへるは、真言新義の祖師にして、画に妙なりしよし伝へたれど、未だその筆跡を見ず。甫雪等禅は松浦郡の人にて雪舟の高弟なり」と記されています。三番目の画家として先ほどの「雲谷等顔は時代少し後れて雲谷周徳の法嗣揚門より伝へ、当国(肥前の国)の人にて毛利氏の画史(当て字、絵師)となり、雲谷を以て氏とす。此の二人は世にも名高き能筆なり」とあり、等禅と等顔は非常に有名な画家だとあります。これ以前に等顔の名前を記したものは、肥前の記録では出てきていません。私が探した限りでは、この本が等顔を肥前の出身だと記したいちばん古いものになるかと思えます。

また、「其の後名と共に筆跡残りたるは葉山潮湖、雪舟を学び、明の松山、李源を慕ふ、甲斐友破、直信(狩野直信松栄)に学び、狩野氏を授かる、山水花鳥宋元に遡れり、馬渡積峰古狩野に深く、鶴田雪春、雪舟に専らなり、栄春其の門より出、都て古建なり」というように、等顔前後に雪舟に学んだりした画家が何人かいるということがこの『画学南北弁』に書かれておりまして、実は今日は、等顔その人よりも、肥前における雪舟の素地について話をしたいと思っております。

最初に出てきた覚鑿上人は、新義真言宗の始祖ということで、鹿島の方は良くご存知だと思うのですが、鹿島の誕生院は覚鑿上人の出身地にちなんで創建されたお寺です。新義真言宗を立てたという功績とともに、仏画を描いたと記されていて、肥前の最初の画家ということになります。先ほどの『画学南北弁』に「未だその筆跡を見ず」と書いてありまして、画家だといわれているけれど作品はないという、たぶん弘法大師や行基菩薩のように、行基菩薩が作った仏像とか弘法大師が描いた絵というのは結構古社寺に残っておりまして、そのように伝説的な画家として覚鑿さんは位置づけられていて、実際に絵を描いたかどうかは不確かということでもあります。ただ、こちらの鹿島においては非常に重要な人物がこの覚鑿上人であります。

等顔のことに戻りまして、全国的な絵画の歴史を江戸時代に記したものがいくつもありますけれど、その中でどのように等顔が記されているかを見ていきます。

慶安年間(1648～52)頃に編纂された『画工譜略』という筆者不詳の本があります。その中には「等顔生国長門の人なり」というふうに書かれていて、ここでは、長門(長州)、山口の出身となっています。「俗の時天正十一年に狩野永徳の門子と成る。子細有て師意違へ所を去て本国(長門)へ帰る。長門の守護毛利元成(就)に伺公す。元就曰此所に雲谷寺在、其の寺に等揚雪舟の絵本印等数多有、是を師として学に無口とて悉く等顔に給、故に雪舟末雲谷等顔と書付在」と書かれておりまして、等顔は長門(長州)の出身で、天正11年に狩野永徳の門人になった。それから何かいわれがあって、師匠の栄徳とは別れて山口に帰り、藩主毛利元就に仕えて、元就から雲谷の寺(雪舟の庵という意味だったと思われる)を与えられた。雪舟等揚の絵や印鑑などがたくさん残っていて、それを学ぶように言われ、雪舟の系譜を継ぐ雲谷等顔と名前を書くようになったと書かれています。

天正11年に狩野永徳に学んだというのは、確証はないようですが、ほぼ認められています。天正11年は等顔が37歳になるのですが、当時京都周辺で活躍していた狩野永徳に入門する。あるいは、永徳のお父さんの直信松栄に学んだと書かれた史料もありますので、永徳か松栄のどちらかに学んだだろうとされています。この記録だけではなくて、雲谷等顔が自ら「狩野等顔」と書いた史料もありますので、雲谷を名乗る前に狩野に学んでいたのはほぼ間違いはないだろうとされていて、この天正11年というのは信憑性のある程度持っているのではないかと考えられています。

狩野に学んで後に、山口の藩主になる毛利家から、雪舟が営んでいた雲谷庵というアトリエを与えられ、さらに雪舟の「山水長巻」という今は国宝として有名な絵巻も与えられて、雪舟の正式な継承者として認められた。アトリエの雲谷という名前を取って、雲谷等顔と名乗るようになったというふうになっています。「等」という名前も、雪舟等揚の一字を取って「等顔」と。では「顔」というと、はっきり記したものはないのですが、中国に顔輝という有名な画家がおりまして、もしかしたらその顔輝の名から取ったのではないかという推察がされています。

等顔が亡くなって半世紀くらい経った江戸時代の本にはこういうふうを書いてありまして、それには残念ながら、藤津能古見ではなく長門出身と書かれています。

もう一つ、1831年(天保2年)に出版された『画乗要略』という本があります。白井華陽という人が書いた画家人名事典みたいなものです。そこには「原等顔通称治兵衛、肥前の人」と出てきまして、記述は先ほどと多くは変わらないのですが、ここでは「初め狩野松栄に学ぶ」と、狩野永徳のお父さんに当たる人物に学んだと書かれています。その後、雪舟の技法を学んだとされています。雲谷等顔がいちばん得意とする画題は山水画なんですけれど、「山水結構緊密脈絡井然」と、山水の描き方をこういう言葉で特徴付けています。非常に緊密な構成で、見た目が整然としているということです。また人物画もよくしたと記されています。そのほか、元就の一代前の毛利輝元がかつて雪舟の筆法などを等顔に学ぶように伝えたというふうに書かれていて、元就よりも毛利輝元の時代に、等顔は雪舟を継承するように命じられたというのが事実のようです。その後、雲谷の家系を作り、その子の等益も、『画乗要略』に名前が記されておりまして、その家名は落ちないと書いています。等益も、等顔の画法を引き継いだということを評価として書いている文章になっています。江戸時代の後半になると、等顔のことは肥前出身だと認識されていたという一例として紹介するものです。

次は、実際の雲谷派、等顔の家の史料を見ていただきます。

山口県文書館所蔵の『閥閥録』という、享保5年から11年にかけて編纂された史料ですが、等顔が亡くなって100年以上経った頃に、雲谷家、等顔の家系の後々の人たちが編纂した史料になります。そこに、「雲谷庵等顔法橋」と見出しが付いて、等顔のことが書かれています。法橋というのは、お坊さんの位と一緒に、法眼、法橋、法印という3段階の位があり、法眼から法橋、法印と登っていきます。等顔は法橋の位にあったということで、等顔橋と書かれています。俗名が「原治兵衛直治」という、これが実際の名前ですね。雲谷等顔というのは画家としての名前であって、本当の姓名を言うと、原というのが姓で、治兵衛は通称です。そして、直治が名前になります。「生国肥前国藤津郡能古見城主原豊後守直家次男也」と明記されていまして、この史料が雲谷等顔の出自を示す一番基本となる史料に位置づけられています。100年後の史料ではあるのですが、何の根拠もなく、書くことはないだろうということ



佐賀県鹿島市 原城跡

とで、ほぼ一般的に認められています。こちらの郷土史の研究をされていた川上先生たちが調べられた限りでは、鹿島の原家の系図には、直家は実在の人物として出てきますが、その次男に直治という名前は見出せないということで、山口の原家の系図と肥前の地の原家の系図が一致せず、疑問を呈する人がいるということです。ただ、竜造寺隆信が天正12年、1584年に島原で戦死した時に、その戦で等顔の父の直家が戦死したのは事実で、その家系につながる直治、つまり等顔は庶子であったのかもしれませんが。

この雲谷家、等顔の家自体に残された史料では、「御引き移りのお供仕り」と書いてありまして、毛利家が関ヶ原の戦以降長門の方に移ったのに伴って等顔も山口の方に移ったとなっています。「雪舟筆山水の大軸拝領仰せ付けられ候て、雪舟流御取立て成られ候に付き、法体仰せ付けられ、山口雪舟旧知雲谷庵之有り候に付き、是又拝領仰せ付けられ、即ち名字に御改め雪舟の名等楊の等の字をかたとり雲谷庵等顔に仰せ付けられ候。」と書いてありまして、さらに「元和四年五月三日死す七十余歳」と。実際には七十二と他の史料には書いてあるようですが、先ほどから言っておりますように、雪舟の大軸（山水図を描いた長い巻物）を拝領したこととか、雪舟庵を継承したことが、自らの原家の史料の中にも書いてあるわけです。

もう一つ、藩主たちが提出した書物の寄せ集めだろうと思われる『譜録』という史料が山口県に残っています。1741年（寛保元年）、先ほどからさらに時代が下る史料ですが、そこには系図が書いてありまして、「父親 原直家 太郎四郎 豊後守」とあって、母は不明となっています。「天正年中肥前の国有馬の戦で戦死」、行年はわからないと書いてあります。その長男が直忠という人物で、そのあと二代くらい続くようですが、その後は分らないと書いてあります。次男の家系の直治が、すなわち雲谷等顔のことでありまして、後の雲谷庵等顔、容膝という号も持っていたようです。元和四年の五月三日に七十二歳で亡くなっています。この記述の七十二歳から逆算して、生まれた年が割り出されているようです。妻は、内林という姓の家の娘であったことも知られます。

ここからは、絵画作品に移っていきたいと思います。東京国立博物館などに、等顔の代表的な山水図屏風があります。

等顔の絵というのは、すっきりとした印象を与えてくれます。先ほどの『画乗要略』に「緊密脈絡井

然」と評されていた、緊密な構成で整然としているという点が特色です。実際の景観からは少しはなれて、垂直方向に切り立つような山を印象的に配置して、他の山とは対比する形で印象付ける構図です。山には、樹木も描かれていますし、家屋なども描かれていますし、人物なども配置されています。

少し詳しくみると、垂直方向に切り立つような山を特徴としますが、頂上付近では逆に水平方向に切るような線が見られ、手前の岩山では岩の輪郭を取り、その内側は黒々と描かれています。樹木も垂直方向に聳え立つものや横方向に枝を張るものが描かれています。建物は、フリーハンドではなく、定規をあてた線で謹直な線が引かれ、もう一つの特色になります。

それから、「また人物も善し」とされていまして、等顔の人物画は、ちょっと猫背で、首を極端に突き出した形が特徴でありまして、衣紋などの線は少ないです。輪郭線と皺の線をいくつか入れるくらいで、体のボリューム感まで表しているという、非常に厳しい線で人体を描き出しております。顔の方は少し緻密に描いておりますが、衣紋線や輪郭線は荒く、その対比で描く水墨人物画の基本を踏まえています。また、達磨の絵も多く描いております。それから有名なものとしては、「梅に鴉図襖」という名称が付いている、京都国立博物館所蔵の襖絵があります。金箔地の上に水墨で描いて一部着色をした、6面一続きの襖絵の大作で、国の重要文化財に指定されています。これは福岡の名島城の襖ではなかったかと言われているものです。京都国立博物館の山本英男氏は等顔研究の第一人者ですが、この作品は等顔というよりも、息子の等益の作品になるとする説を出しておられます。やっぱり等顔だという人もいて、まだ決着は見えていません。

等顔は雪舟の継承者ということになるのですが、雪舟について確認しておきます。

雪舟は15世紀の画家で、等顔よりもかなり早い時期に活躍して、等顔とは全く世代が重なりません。

雪舟は、備中の国の赤浜（岡山県総社市）で生まれ、京都御所のすぐ北側にある相国寺という臨済宗のお寺で、天章周文という画僧に絵を学んだと言われていました。後に、東福寺の明兆という画僧にも学んだと言われていました。それから、長州を治めていた大内氏の庇護を受け、雲谷庵というアトリエを構えます。大内氏の交易船で中国に渡って学び、帰国後、大分に天開図画楼というアトリエを構えて、九州にたくさん弟子たちもおまして、九州とは非常に関係が濃密な人物です。雪舟の真筆は非常に少なく、贋作や後世雪舟筆とされた作品の方が圧倒的に多いようです。

等顔は最初は狩野派に学び、後にこの雪舟に学んでいくという画家ですが、どこをどう学んだかということについては、今日は詳しく話しませんが、雪舟の輪郭線とか構成を整理して再構成したのが等顔です。

ここからは、雲谷等顔前後の佐賀の状況を紹介していきます。

室町時代末から江戸時代前期、雪舟流から雲谷派、そして狩野派へと推移していくというのが、肥前の大きな流れです。ここで、先ほどの『画学南北弁』に出てきました甫雪等禅、葉山朝湖に加えて広渡雪山の3人をピックアップして紹介します。

甫雪等禅は、雪舟流弟子と伝えられます。葉山朝湖は雪舟流から、藩主の命令で狩野派に転向したと思われる。広渡雪山は雲谷派の色彩が非常に強い画家だったのですが、これも藩に抱えられた頃から狩野派に変わっていくということになります。

まず甫雪等禅は、名前からして雪舟流らしい人物なのですが、この人は江戸時代のいろんな画人伝、肥前松浦の人で、雪舟の弟子と記述されています。人物、花鳥を中心に作例も多いのですが、残念ながら生没年が書かれたものがなく、活躍時期が押さえられていません。詳細は不明ですが、肥前における

雪舟流の受容の先駆として重要な存在であります。肥前関係で作品が確認できる最古の絵師です。

先ほど、覚鑿上人が名前としては肥前関係の中で一番古いと申しましたが、覚鑿上人の絵であると確認できる作品は今は1点もありませんので、肥前の出身で作品が残るという意味では、この等禪が最初になります。鍋島報効会や佐賀県立博物館、その他、佐賀県や福岡県の臨濟宗のお寺にも残っていますので、実際肥前の地周辺で活躍したと考えられる重要な画家が、この等禪です。しかも直接雪舟に学んだのではないとも言われているのですが、その根拠は薄くて、弟子筋ではないか、世代も雪舟の生きた時代ではなく、亡くなった後の16世紀の中頃くらいが活躍の時期ではないかと今は考えられています。

当館が所蔵している達磨さんの絵は、等顔の絵のように、線がきちっと整理された描き方ではなくて、やや荒い線です。手元の辺りがやや小ぶりかなというバランスがありますが、特徴としては、目の上の眉が、毛が長いというのは達磨さんの特徴なのかもしれませんが、眉辺りの肉が盛り上がったように見えます。この辺りが等禪の人物画の特色の一つです。他にも、文殊菩薩や白夜観音、花鳥画も描いています。雪舟流の花鳥画の影響が濃厚な、着色のある濃彩の花鳥図も描いています。

次に紹介するのが葉山朝湖という画家で、雪舟流から狩野派に転向するという画家です。与賀町に龍泰寺という大隈重信を祀った寺がありますが、その辺りを中心に勢力を持った与賀龍造寺という家の流れの二男坊として生まれたのが葉山朝湖です。作品はそう多くない、10例くらいですけれども、雪舟流の山水画と狩野派的な人物画と二種類が残っています。佐賀藩の初代藩主鍋島勝茂の命で、江戸で狩野派を学んだのがこの人物です。注目すべきは、加藤清正の求めに応じて熊本城の障壁画を描いたという伝えもあります。また、書のほうも優れていて、能書家としても記録に残っています。これが朝湖の書だというのははっきりしたものはないのですが、能書家としても知られていました。政治的なことで佐賀藩に反抗して、藩から切腹を命じられました。

次に紹介するのは広渡雪山です。雪山は、武雄の絵師として活躍しているのですが、途中で、1654年に佐賀藩に召抱えられたという経歴の持ち主です。残っている作品を見ると、雲谷派に学んだと思われる絵と狩野派の影響を受けたものと二種類出てきます。その雲谷派に影響を受けたと思われる絵が、当館が所蔵している金山寺という中国のお寺を描いた絵です。整然とした等顔を思い出すような緊密な構成で整然とした山水図が、広渡雪山の絵の中にも出てきて、等益の絵と比べてみると、等顔よりもさらに等益の絵に近いということがわかってまいります。等益は、横方向に枝を張って伸びる樹木を得意としているのですが、金山寺屏風にも、横方向に伸びる同じような樹木が描かれています。また、等益の屏風には、金粉を擦りつぶして絵の具状にして塗った金泥が塗られているのですが、雪山の絵も同じように、金泥が要所要所に塗られていて、そういう用法まで一致しています。履歴には雪山は雲谷派に学ぶとは一切書かれていないのですが、おそらく直接学ぶことがあったのではないかと考えています。

最後にもう一人、特色のある絵描きが肥前から出ていまして、狩野山雪という画家です。狩野山雪は京都で活躍する京狩野という狩野の一派の代表的な画家として、私どもの世界では非常に有名なのですが、個性的な表現を致します。彼も肥前の松浦の出身とされています。等顔とはまた別の嗜好で水平垂直を強調する絵を描いた画家です。

これでまとめにしますけれど、雲谷等顔は雪舟とは全く世代が重ならない半世紀後の人物なのですが、雪舟没後も雪舟流直弟子、それから等禪のような孫弟子世代もいます。雪舟流というのは16世紀に非常に全国に多く展開するのですが、その中にこの等顔が出てくる。そこに雲谷派の流れが出てきて、

等顔の息子に引き継がれ、脈々と幕末まで続きます。その前後に佐賀の地でも、葉山朝湖が雪舟流を学び、広渡雪山がもしかしたら等益に直接学んで雲谷派をつなげていく、それからまた別の個性を発揮した山雪が活躍するという素地があって、肥前の地にもかつて雪舟流や雲谷派の絵師がいたということで、等顔が突然肥前の地に現れたのではなくて、素地とか影響が認められるというところではないかということだと思えます。